

〈新生〉事件まで——『月に吠える』後半の課題(一)

渡 辺 和 靖

Kazuyasu WATANABE

(哲学教室)

(1) 休 筆 宣 言

大正四年六月四日付で、北原白秋にあてて、

余は当分余の詩篇を印刷に付して発表することをやめます、(絶対に)萩原朔太郎なるものをして二度〔と〕詩を作らざる詩人たらしめよ、(『萩原朔太郎全集』——以下『全集』——第13巻, 100頁, 筑摩書房)

と書きおくって以来、翌五年五月にいたるまで、およそ一年間、朔太郎は、まったく作品の発表を中止してしまう。⁽¹⁾

この一年におよぶブランクが、どのような理由によるものなのか、かならずしも明らかにされていない。この点について、伊藤信吉氏は、「音楽の中の詩人」(『本の手帖』昭和38年3~4月)で、

作品発表のなかったその十か月間を音楽の側についてみると、マンドリン合奏団ゴンドラ洋楽会の設立をはじめ、その試演会、詩と音楽の研究会の集まりなど、次々に音楽のあれこれに熱中した。いかに小規模でもマンドリン合奏団の編成は大仕事だし、試演会の定期開催も容易でなかったろう。(『萩原朔太郎 I 浪漫的に』111~2頁, 昭和51年7月, 北洋社)

と述べ、この時期の朔太郎の沈黙が、音楽活動への没頭によるものであることを示唆している。佐藤房儀氏も、『詩人萩原朔太郎』(昭和52年11月, 双文社出版)で、この伊藤氏の見解を支持したうえで、

大正四年の創作を中断した背景には「ゴンドラ洋楽会」設立による多忙さもあったであろうが、かつて音楽に憧れた情熱がまだくすぶっており、詩への疑問から音楽に引かれることもあったのかも知れない。(269頁)

と付け加えている。

しかし、こうした音楽活動が、一年間のブランクの主要な原因であったとは思われない。というのも、朔太郎は、この時期にいたって、突然、音楽にのめり込んだわけではないからである。

「習作集第八巻」の前半部分、大正二年四月から五月に制作された作品のうちに、つぎのような作品が見える。

絵をかかも／歌をつくるも／キオロンを奏なづることも／そのころはひとつ／そのひとつを求めんとて／我はかくもやるせなき日を送るなり。(『全集』第2巻, 389頁)
かなしくもふるさとに帰り居て／うたつくりとは成りはてにけむ／この日町のはづれ

をさまよひしが／しんとせるころになりてかへりたり／きのふびあぜるの絵をながめ／けふは蓄音機のしよばんをきく／わが田舎ずまひはなにといふ心やすきぞ／窓には苗香の花も咲けり（同、411頁）

これらの詩句から知られるように、音楽は、詩歌や絵画とともに、大正二年二月に、長い漂泊の旅から故郷前橋に帰りついて以来、つねに朔太郎の心のなぐさめであった。また、大正三年一月の「日記」にも、朔太郎が熱心にマンドリンの練習をしていたことが記されている。音楽が、大正四年のこの時期になって、突然、朔太郎の詩作をさまたげたと考える理由はなにもない。

はやく久保忠夫氏は、「朔太郎とドストエフスキ」（『比較文学』昭和33年4月）で、「休筆宣言」以後の「一年間の沈黙」を、『月に吠える』の世界を「両断する境界線」と指摘し、そこには、「人生いかに生くべきか」の問題に、真剣にとりくんでゐる朔太郎の姿がある」と指摘した。（30～3頁）また、これをふまえて、久保氏は、「三木露風一派の詩を追放せよ」まで（『国文学 言語と文芸』昭和43年1月）で、大正四年五月二十六日付の白秋宛「書簡」に見える「詩歌の虐待事件」、すなわち、白秋が『ARS』に掲載を拒否した川路柳虹の作品が、前田夕暮の主宰する『詩歌』に、朔太郎らの作品よりも優遇されて掲載された事件が、一年間の沈黙の直接的な契機になったと指摘している。（34頁）

安藤靖彦氏は、「握った手の感覚」前後——萩原朔太郎論の一節（『国文学 言語と文芸』昭和38年11月）で、大正四年五月の金沢旅行において、「『善』の詩人」であるところの室生犀星と「『悪』の詩人」であるところの朔太郎との「資質の溝」が明白となり、それが雑誌『卓上噴水』の廃刊となり、ひいては一年間の「制作中絶」をもたらしたと論じている。（53頁）また安藤氏は、「朔太郎の一年の沈黙の意味はなにか」（『国文学 解釈と教材の研究』昭和53年9月）で、さきの論文をふまえて、「一年間の中絶」は、「浄罪詩篇」において朔太郎を苦しめた「神経の痛み」が「主調基音」としてあり、それが犀星との「交情の破綻」を直接の契機として表面化したものと分析している。（110頁）

また、田村圭司氏は、『月に吠える』から『青猫』へ（『国語国文研究（北海道大学）』昭和56年2月）で、「音楽が詩に代って彼の芸術的要求のすべてを充したとも思われない」としたうえで、この「約一年間の空白期」の原因について、つぎのように論じている。

彼が倦怠に陥る原因は、「病氣」を透視したことにある。「病氣」は「詩」を求めることで生じた。彼は、健康であろうとすれば「詩」を諦めなければならず、「詩」を求めようとするれば「病氣」と倦怠に陥る。空白の時期を迎えた理由は、このような二律背反的状况にあったと思われる。（50～1頁）

このほか、板垣俊英氏は、「『感情』論ノート——『抒情小曲集』と朔太郎の詩」（『尾道短期大学研究紀要』昭和60年10月）で、「この時期の朔太郎の詩作の中断現象の裏には、当時の詩壇に対する不満と絶望が隠されているのではないか」と推測している。（20頁）

しかし、これらの見解は、確定的な証拠を欠いており、推定の域をでていないばかりでなく、いずれの見解も、朔太郎の休筆宣言を、額面どおりに受けとりすぎているきらいがある。さきの「書簡」にたいする白秋の問い合わせに応じて、朔太郎は、六月十七日付でつぎのようにしたためている。

先便の主意は雑誌を拝借して自作を公表することを当分見合わせるといふ意味なので、す、「詩を作らざる」といふことは外観上のことで実際は盛に作るつもりです、秘密に

ある事業を創造するといふことに一種の破壊的興味を感じてああいふ決心をしたので、
「彼は詩を忘れかけた」と思はれ[た]ときに素敵な勢で公衆のまへにとび出した
いのでした、(同、101頁)

この「書簡」は、これ以後一年間朔太郎が作品を発表していないこともあって、これまで、
たんなる弁解としてかならずしも深刻には受けとられていない。那珂太郎氏は、『『月に吠える』
制作中の一時期について』(『古典の窓』昭和34年1月)で、この「書簡」をさきの「休筆宣言」
とあわせて引いたうえで、

だが弁明は弁明として、彼は、事実結果的に一年間沈黙を守つた。その間、『詩を作らざる』
といふことは外観上のことで実際は盛んに作る」ことを彼はしたであらうか、いや、さうでなく、
名実共に彼は約一ケ年「詩を作らざる詩人」となつたのではなかつたらうか。翌年五月以降の、
作品公表再開後の様子では、この間ひそかに作品を書き溜めてゐたとは思はず、少なくとも量的には、
決して『彼は詩を忘れかけた』と思はれたときに素敵な勢で公衆のまへにとび出すといへる程の多作ぶりを示したわけ
ではなかつたのである。(『萩原朔太郎その他』59頁、昭和50年4月、小沢書店)

と論じている。

しかし、この「書簡」をそのまま読めば、朔太郎は「秘密にある事業を創造する」ことを
もくろんでいたのである。この点については、真面目に考察してみる必要があるようである。

その秘密の「事業」とは、いったい、なにか？

それが、詩集の発刊を意味していることは、ほとんど疑いない。この「書簡」での「ある事業」といういい方、
そして、「素敵な勢で公衆のまへにとび出したい」といういい方は、『月に吠える』刊行の直前、
大正五年十月二十九日付の萩原栄次宛「書簡」で、「実は来年私がある記念物を作りあげてから御手紙を始めてあげる考だつたのですが」と、
「ある記念物」に言及し、「記念物といふのは処女詩集のことです、いづれ来年は出します、そしたら
多少世間的の評価をうることゝ思ひます」と述べているのと同様の発想を示している。(『若き日の萩原朔太郎』223～6頁、昭和54年、筑摩書房)

また、およそ半年前の大正三年十一月十一日付の萩原栄次宛「書簡」で、詩集発刊について言及し、
「日本空前の表装と空前の内容とをもつた大詩集を出して世界を驚倒せしめる予定です」と述べているのとも共通している。(同、186頁)

引用した栄次宛の二つの「書簡」で、朔太郎は、詩集の出版を、詩壇における自らの位置とかかわらせている。
大正三年十一月十一日付では、

自分で自分のことを言ふのは可笑しい話ですが現代の日本に実力で小生と^{アツ}足敵するに足る詩人は一人も居ません、(中略)自分の文壇に於ける地位も、自分の生も死も、すべて一切のことは来年度に於て決定するのです、(中略)若しも戦争に克つたならば私は記念として詩集を兄にデゼケートします、(同、186～7頁)

と書き、大正五年十月二十九日付では、

今の詩界に於ける私の地位は 最も新進にして最も異色ある作家と目されて居るので、
／ある大家の詩人は私が今まで黙つて前橋の田舎にかくれ居たことを日本詩壇の奇蹟だとも
言はれました、／またある大家は私がまだ世間的に名を知られない中に私を葬むろうとして陰險なる卑劣なるあらゆる悪手段をめぐらして居るので、／私は

そういふ文壇の暗流といふやうなもうに始めて触れて非常に怖れたり不愉快な思をしたりして居るのです、(同、225頁)

と述べている。つまり、詩集を発刊するという朔太郎の決意は、詩壇における「戦争」「暗流」に勝利し、「世間」「世界」に自らの名前を決定的に印象づけるという意味をになっていたのである。

これを、久保忠夫氏の指摘にもあった、「休筆宣言」直前の、大正四年五月二十六日付の白秋宛「書簡」の

詩歌の虐待事件は懺悔にたえず、雑誌を見た上で何とか致します、●川路の微笑を想ふとぞつとする、一人や二人なら兎も角我々三人がそろひもそろつて悔辱されたこと実に人魚詩社の歴史的屈辱です、(『全集』第13巻、99頁)

という発言と合わせて考えると、さきの六月十七日付の白秋宛「書簡」における、「秘密にある事業を創造する」という言葉が、たんなる弁解ではなく、詩集を出版し「公衆」に自らをアピールする決意と計画を表現したものであることは疑いない。

朔太郎が、休筆中もひそかに詩集発刊へむけて活動を行っていたことは、「休筆宣言」から約半年、大正五年一月二十七日付の恩地孝四郎宛「書簡」で、のちに『月に吠える』をかざることになる、田中恭吉(大正四年十月死去)の遺作を受けとった旨を報告し、「恭吉氏が小生のためにあの創作をつづけながら冥目されたことを思ふと私は何とも言ふことの出来ない深い感動に打たれます」と書き、さらに、「私はどんなにしても私が一人の知己……既に地上を去つた……一人の天才画家の真実に報いなければならない。私は吃度やります。出来るだけのことはやります」と決意を披瀝していることから知られる。(『全集』第13巻、106～7頁)

朔太郎が、本格的に始動するのは、これ以後のことであろう。しかし、朔太郎が、詩集の計画を具体的に構想しはじめたのは、詩集の挿絵として、田中恭吉に作品を依頼した時期にさかのぼる。つまり、朔太郎は、「休筆宣言」をはさむ比較的ながいが期間をつうじて、持続的に詩集発刊の計画をあたためていたのである。

『月に吠える』に収められた「故田中恭吉氏の芸術に就いて」のなかで、朔太郎は、つぎのように記している。

雑誌「月映」を通じて、私が恭吉氏の芸術を始めて知つたのは、今から二年ほど以前のことである。(中略)その頃、私は自分の詩集の装幀や挿画を依頼する人を物色して居た際なので、この新しい知己を得た喜びは一層深甚なものであつた。まもなく恩地孝氏の紹介によつて私と恭吉氏とは、互にその郷里から書簡を往復するやうな間柄になつた。(中略)当時、重患の病床中にあつた恭吉氏は、私の詩集の計画をきいて自分のことのやうに悦んでくれた。そしてその装幀と挿画のために、彼のすべての「生命の残部」を傾注することを約束された。(『全集』第1巻、108頁)

この文章が書かれたのが大正五年十月中旬であることは、同時期の恩地宛「書簡」に、田中氏の芸術その他につき大兄の特にお書きになつた文章があれば、詩集にのせたいと思ひます。(小生も、一、二枚の紹介をかきました)。(中略)今度の詩集に於て兄と故田中氏と小生との芸術的肉交を感じ得ることに異常な歓喜と光栄とを感じて居ます。(『全集』第13巻、134頁)

とあることから知られる。その二年前であるから、朔太郎が田中を知つたのは大正三年十

月前後ということになる。

また、やはり『月に吠える』に収められた田中恭吉の「挿画付言」に「私はまづ思つただけの仕事を仕上げました。この一年は貴重な付加でした」とあり(『全集』第1巻, 103頁)、田中の死去した大正四年十月の一年前といえ、大正三年十月。

いずれにしても、大正三年十月頃までには、朔太郎はすでに詩集発刊の計画をあためており、田中恭吉にその装幀と挿絵を依頼していたと考えることができる。⁽²⁾このことは、すでに引いた大正三年十一月十一日付の萩原栄次宛「書簡」に、「小生の詩集は来年の冬か来々年の春には必ず出版する予定です、無論出版する上は日本空前の表装と空前の内容とをもつた大詩集を出して世界を驚倒せしめる予定です」(前掲, 186頁)と、詩集の計画がはっきりと語られ、その「表装」について言及されているのに符合する。

また、「休筆宣言」の三月前、大正四年三月十七日付の栄次宛「書簡」に、「どうしても今年の中に詩集の準備をしなければならないのに現在のやうな沈滞の状態ではとても話になりません、ほんとにどうしたらいいのでせう」(同, 215頁)という、切迫した言葉が見える。大正三年十月に発した詩集発刊の計画が、「休筆宣言」直前の段階にあっても継続中であつたことがわかる。

朔太郎の沈黙の背景に、こうした詩集発刊への強い意欲があつたことは確実である。その間、ありうべき詩集を構想しつつ、しかも、これまで書きためた作品によってはそれが実現できないのではないかと、いうかすかな不安にさいなまれつつ、朔太郎は、新しいモチーフの成熟を、ひそかに期待していたと考えられる。

そして、新しいモチーフは、突然やってきた。大正五年四月の「新生」事件がそれである。

(2) 「雲雀の巣」

この事件の考察に入る前に、一年間の沈黙を破って『詩歌』大正五年五月号に発表された、長編詩「雲雀の巣」にふれておきたい。というのも、雑誌発表にさいしてこの作品に付された前田夕暮宛「書簡」に、「雲雀の巣」は新生以前の作です、どん底時代の作です」とあるからである。(『全集』第13巻, 110～1頁)そこには、朔太郎が「新生」にいたる直前の心境が語られていると考えられる。

米倉巖氏は、『萩原朔太郎——文体核と文体素』(昭和57年9月、審美社)で、「雲雀の巣」を、ドストエフスキーとの出会いによつてもたらされた「新生」事件以後に成立したものと推定し、「これは今までの詩篇にみられる静的な姿勢から、一步前進した魂の安寧を意味していよう。いうなれば、ドストエフスキーとの本格的な出会いで得た精神的救済が文学意識の領域にまで少しなりとも拡大されたということになる」と評価している。(45頁)

「雲雀の巣」のうちすでにドストエフスキーによつてもたらされた「精神的救済」が表現されているという米倉氏の分析は首肯しがたいが、「雲雀の巣」の成立が「新生」事件以後であるという可能性は、じゅうぶん考えられる。おそらく、「雲雀の巣」は、「新生」事件とほぼ同時に制作されたものであり、両者は表裏の関係をなしていると考えられる。しかし、たとえ、その執筆が「新生」事件以後であるとしても、朔太郎自身は、それを「新生以前」の心境を描いたものとして自覚していたのであり、そこに表現されたものは、救済そのものではなく、救済をまちのぞむ朔太郎の心境であつたと考えべきであろう。し

たがって、この作品を分析することによって、「新生」にいたる経緯と、それによってもたらされた救済が、朔太郎にとって、どのような課題への解決であったのかを知ることができよう。

朔太郎は、利根川のほとりを歩いていて、草むらのなかに「雲雀の巢」を見つける。朔太郎は、「あへぎくるしむひとが水をもとめるやうに」手をのぼし、それをつかみとる。卵を指でつまんでみる。「卵がやぶれた。」(『全集』第1巻, 84～6頁)

いたいけな鳥の芽生、鳥の親。／その可愛らしいくちばしから造つた巢。一生けんめいでやつた小動物の仕事。愛すべき本能のあらはれ。／いろいろな善良な、しほらしい考が私の心の底にはげしくこみあげた。／おれは卵をやぶつた。／愛と悦びとを殺して悲しみと呪とにみちた仕事をした。／くらい不愉快なおこなひをした。／おれは陰鬱な顔をして地面をながめた。／(中略)／おれはまたあのいやのこをかんがへこんだ。／人間が人間の皮膚のにほひを嫌ふといふこと。／人間が人間の性殖機を醜悪にかんずること。／あるとき人間が馬のやうに見えること。／人間が人間の愛にうらぎりすること。／人間が人間をきらふこと。／ああ、厭人病人。／ある有名なロシア人の小説、非常に重たい小説をよむと厭人病者の話がでて居た。／それは立派な小説だ、けれども恐ろしい小説だ。／心で愛するものを肉体で愛することの出来ないといふのはなんたる邪悪の思想であろう。なんたる醜悪な病気であろう。(同, 86～7頁)

朔太郎は、自らの行為を「惨虐な罪」「醜悪の病気」と自覚している。そう自覚して、はげしく「懺悔」する。

おれはくるしくなる。／おれはさびしくなる。／心で愛するものを、なにゆゑは肉体で愛することができないのか。／おれは懺悔する。／懺悔する。／おれはいつでもくるしくなると懺悔する。(同, 88頁)

しかし、同時に、朔太郎は、それが、どうすることもできない一つの「本能」の発現であると感じている。「巢」も「卵」も「本能のあらはれ」であるように、卵をにぎりつぶすという行為も、やはり本能的な反応である。それは、「死にかゝつた犬をみるときのやうな歯がゆい感覚」であり、「人間の感覚の生ぬるい不快さ」である。

「卵」という言葉に、ことさらに象徴的な意味を付加しなければ、⁽³⁾ここに示されたものが、一つの「本能」にたいして、もう一つの「本能」が、どうしようもなく対立してしまうという朔太郎の認識であることは容易に読み取ることができよう。「人間が人間をきらふこと。」「心で愛するものを、なにゆゑは肉体で愛することができないのか。」こうしたフレーズは、この作品に込めた朔太郎の認識をたんに示している。

そして、そうした観点からすれば、ここに描かれた、「雲雀の卵」をにぎりつぶすという行為は、高橋元吉に「新生」を報告した四月十九日の「書簡」⁽⁴⁾で告白されている、二つの「体験」と明らかに関係していることがわかる。

「雲雀の巢」とこの元吉宛「書簡」との「深いつながり」については、木村幸雄氏が、「萩原朔太郎の「雲雀の巢」について」(『日本文学』昭和54年2月)で、すでにふれている。木村氏は、「雲雀の巢」の、

そのときゆびとゆびとのあひだに生ぐさい液体がじくじくとながれて居るのをかんだ。／卵がやぶれた。／野蛮な人間の指がむざんにも繊弱なものをおしつぶしたのだ。／ねずみいろの薄い卵の殻にはKといふ字がほんのりとかゝれてゐた。(前掲, 86頁)

という部分に見える「Kといふ字」に関連して、「K」は、四月十九日付の高橋元吉宛「書簡」に登場する「木村君のイニシアルとして読むことによって、詩の内容にいっそう深くふれることができるのではなかろうか」と提言している。(86頁)

「Kといふ字」の解釈については異論があるが、⁽⁵⁾「雲雀の巢」と四月十九日付の高橋元吉宛「書簡」とを結びつけ、

「書簡」の中で、「新生」体験の感激を語りながら、それ以前の自分がいかに愛のない、救いのない、「醜悪な人間」だったかということ、縷々告白している。自分の人間としての卑劣さ、醜悪さを懺悔しなければならぬ例として、友人のNや木村君という人物に対して朔太郎がとっていた態度のことを述べている。(86頁)

という「書簡」の内容をふまえて「雲雀の巢」を解説する木村氏の態度は、正しい方向を示したものと評価することができる。

この「書簡」のなかに、「信仰に入る一週間ほど前にかいたものにも厭人病者の話がでて居た」とあるのは、「雲雀の巢」の「ある有名なロシア人の小説、非常に重たい小説をよむと厭人病者の話がでて居た」という部分を指しており、⁽⁶⁾この「書簡」を「雲雀の巢」と関連させて読むことにはじゅうぶんな理由がある。

「書簡」のなかで、朔太郎は、二つの「実例」をあげて、かつての自分が「人を愛することの出来な」い、「醜悪な人間」であったことを告白している。一つは、「私の詩の愛読者」で「田舎の小学教師をしてゐるNといふ人」にたいする不実な扱い。「私はまるで自身の足下（フタ）にちやれつてくる犬を蹴（キ）ちつけたやうなことをしたのです。」

彼がかへつたあとで私は泣きたいやうな気になつた。追つかけて行つて彼を呼び返さうかと思つた。けれども彼の顔が私の前に現われたとき私はまた前と同じことを繰返さなければならぬことを知つてゐた。／(中略)私はほんとに畜生のやうな下劣な心をもつた人間だとしみじみ思つた、だれかきて私をなぐつて呉ればいゝと思つた。併し私は一体どうすればいゝのだろう。私の思想が彼を愛してゐる、そして私の行為はそれに反対してゐる、私はどうすればいゝのだろう。(同、112～3頁)

もう一つは、「木村君」の「離婚問題」。「木村君はすべての秘密を私に打ちあけてくれました」「併し不思議なことには私の本能はそれをまるで裏切りすることに興味をもつて居ました」「ああいふ美しい至純の心をもつた人を卑劣な私の興味のために弄んだといふことはどんなに私の醜悪を証明するか。」

私は右へ行くためには私の神経を殺さなければならない。左へ行くためには良心を殺さなければならない。そうしてどつちも私の本能だ。だれが自分の本能を殺すことが出来やう。(中略)につちもさつちも動かない四苦八苦の苦しみが私を陰鬱（ツツ）にさせた。『私には愛がない。ほんとに愛といふものがない』しまひにはそう思つた。これははずいぶん私を苦しませた。(『全集』第13巻、113～4頁)

この「書簡」を参照するならば、「雲雀の巢」に描かれた、鳥の卵をにぎりつぶすという行為は、好意をもって接近してくる他人にたいして、「本能」的に反発してしまう朔太郎自身の心の動きとして解説することができる。朔太郎は、そのことに、はげしい苦痛を感じていると同時に、どうすることもできないというもどかしい思いにとらわれている。「書簡」では、「Nといふ人」の場合も「木村君」の場合も、「併し私には『そうするより外に仕方がないんだ』『わたしにはそうするより仕方がなかつたんだ』」とある。それゆえにこそ、

それは「本能」と呼ばれるのである。

「雲雀の巢」は、しかし、木村幸雄氏がいうように「朔太郎の苦しい自己内省がドストエーフスキイとの出会いによって、人間洞察へと深められ」「苦渋にみちた自己内省・人間洞察を通じて懺悔を深め、愛を希求する方向にみさだめられ」(前掲, 88頁)た作品ではない。むしろ、苦渋にみちた自己認識の深みにおいて、激しく救済を求める姿を示したものである。それ故にこそ、朔太郎は、この作品を、「新生以前の作」「どん底時代の作」「信仰に入る一週間ほど前にかいたもの」というように位置づけているのである。ただ、「雲雀の巢」には、新しいモチーフの片鱗が、ほの見える。すなわち、「本能」をもった人間が、いかにして他者と結びあうことができるかというモチーフ。これは『月に吠える』前半期の作品には見られなかったものである。⁽⁷⁾

同じ元吉宛「書簡」に、朔太郎が、

私はかつてほんとに人を愛することの出来なかつた人間です。『愛』といふものが全く私にはないのではあるまいかと疑るまで醜悪な人間だつたのです。今度の新生が私にとつて有意義なもの自身には全くないと思つて居た『愛』を発見したからです、(前掲, 111頁)

と記したのは、「新生」事件が、こうした「雲雀の巢」に描かれた、内面の葛藤にたいする解答として到来したものであったことを示している。

(3) 「新生」事件

「新生」は、突然、朔太郎をおそった。『詩歌』大正五年七月号に発表された、この事件の顛末を書きしるした「握つた手の感覚」によれば、それは、四月十九日のことであつたという。四月二十二日付の北原白秋宛「書簡」で、朔太郎は、さっそく、つぎのように報告している。

私は救はれました、私は私の過去三十年間の生活を根本からひっくり返すやうな破目に立ちいたりしました 私はほんとの私を発見しました、私は苦しみもがいてどん底に落りました、そして今はほんとの真如に入りました、大歓喜の絶頂に居ます、(『全集』第13巻, 110頁)

このよろこびは、さきに引いた前田夕暮や高橋元吉にあてた「書簡」にも、「私はどん底に陥りました。そしてしまひには救はれました。私は神を発見したのです、これは実に容易ならぬことです」(同, 110頁)「新生それがこれから始まるのです、私はいま子供のやうなよろこびにみちて居ます、何を見ても新らしく何を見ても希望にもえて居ます」(同, 115頁)などと記述されている。「新生」が、朔太郎にとって、きわめて大きな意義をもっていたことは疑いない。しかし、それは、朔太郎にとって、どのような意味で、過去からの「新生」であつたのか？

「新生」事件の具体的な内容に入る前に、この事件が『月に吠える』にいたる展開のなかに占める意味について考えてみたい。この事件については、いろいろ議論されているが、もっとも重要な点が、まだ見逃されているように見える。すなわち、この事件は、朔太郎にとって、新しい詩作の出発点になつたということである。

夕暮宛「書簡」では、「私の神を発見した(発見といふよりは神の手にふれるといふ方が正しい)ことは私一人のよろこびでなく人類全体の福音だと思ひますから詩歌次号からひ

きつづいて発表したいと思ひます」(同, 110頁)と、作品発表への強い意欲を見せ、また、元吉宛「書簡」では、「私はほんとに涙をぼろぼろ流しながら二篇の詩をかきました」「この大喜悦はいくら書いてもいくら書いても書ききれません。すっかり子供のやうな気になりました。何をかいても詩の中の主人公が自然と子供になってしまうのは不思議〔で〕す」(同, 115頁)と、事件が詩作とともに到来したことを伝えている。そして、実際、これ以後、朔太郎の創作活動は一気に爆発することになるのである。

元吉宛「書簡」に見える「二篇の詩」のうちの一つが、『狐の巢』大正五年五月号に掲載された、対話詩「桜の花の咲くころ(此の消息を親しき人々に捧ぐ)」であることは間違いない。

A『君とはしばらく逢はなかつたね』/S『さう、ちよつと一年にもなるかね』/A『ちよつとも顔を出さなかつたぢやないか。どこへも』/S『さう、どこへも出なかつた』/A『家にばかり居て退屈しやしなかつたか』/S『どうして、退屈どころぢやない』/A『なにして居た』/S『たいてい眠つて居た、⁽⁶⁾眠るのは愉快のものだからな、よく眠つた朝にはいい便りがくるといふのはほんとだ』/A『それぢや今はだいぶ元気と見えるね』/S『いまではどんなことでも出来るやうな気がする』(冒頭『全集』第5巻, 371~2頁)

この一篇は、まさしく、朔太郎の復帰宣言であった。その末尾の付記には、「この一篇は私からみんなへの消息である。／最後に、最近の自分はある偉大なる人の救ひによつて一切の煩悶から逃れ力強い信仰と楽しき平和の境に安住して居ることを付記しておく」とある。「ある偉大なる人」とは、「雲雀の巢」に見えた「ある有名なロシア人」、ドストエフスキーのことであるが、これについては別稿で論ずることとしたい。

ところで、朔太郎は、六月初と推定される高橋元吉宛「書簡」で、「新生」事件が、一時的な興奮状態であったことを告白している。このことが、「新生」事件の評価を多少複雑にしている。

さて最後に是非とも御話しなければならない事件があります、／それは、私が「救ひ」を得たことの、実は一種の幻影にすぎなかつたことです、／(中略)あの事実の起つた日の翠日から既に私の信仰は不安を感じて居ました、もつと嚴重にいへばあの狂的な靈感におそはれて泣き叫んだ瞬間がすぎ去つたときから、もう既に信仰は失はれて居たのでした、(中略)／私はやつぱりもとの通りの私です、救はれるどころか一層苦しい地獄に居るのです、(『全集』第13巻, 124頁)

この問題にかんして、安藤靖彦氏は、「握った手の感覚」前後——萩原朔太郎論の一節」で、「新生」体験が、一週間たらずで「色褪せてしまった」ことは「彼の罪性認識の浅さを証明する」と指摘し、「生えざる苗」や「虹を追ふひと」は、朔太郎の「挫折」の記録であると論じている。

こうして残ったものは「握った手の感覚」だけとなった。それでも、彼はこれを「一種の力」として信じようとした。けれどもそれがあまりにも空しい言であることには違いない。(前掲, 56~7頁)

また、小野田典子氏は、「ドストエフスキーとの邂逅——萩原朔太郎論」(『学習院大学国語国文学会誌』昭和58年2月)で、「新生」体験についての論考は数多いが、「この《大歓喜》なるものが、一時的幻影に終ってしまったという心的経過の激しい変転については、いまだ

充分に明解な説明が与えられているとはいえない」(57頁)とし、朔太郎のドストエフスキー体験を、もっぱらキリスト教の文脈から、つぎのように解説する。

苦悩から歓喜への飛躍は、ただ神の奇蹟によってのみ与えられるのであり、神を信じることができなければ、赦しの奇蹟も起きるはずがない。と同時に、自己の真実の姿を冷徹に見据える詩人は、自己の存在を突き詰めることを断念しない限り、奇蹟が起きるはずはありえないことに気がつく。自己究明の断念は、彼にとって自己の喪失である(65頁)

しかし、このような評価は、「新生」事件が朔太郎にもたらしたものの意味を見誤っている。「救い」が「一種の幻影」にすぎなかったと告白した元吉宛「書簡」で、朔太郎はつづけてつぎのように書いている。「新生」は、けっして「無意味のものではなかった」。なぜなら、

少なくとも「愛」が神の実体であるといふことを感得したのはあの不思議な病気のおかげでした、そしてあの発作以後の私は以前の私に比して「力」を感じて居ることがずつと強いのです、／(中略)／少なくともあの時以来、私は新しい道を発見したので、**「救はれはしなかつた」**けれども**「救ひに導かれた」**のは事実です、(『全集』第13巻、124～5頁)

「新生」はたんなる「幻影」ではなく、「挫折」ではなさらなかった。詩人にとって「挫折」とは、作品を創造する力の枯渇以外のことを意味しないはずである。しかるに、なによりも、「新生」は、朔太郎に、詩作の新しいモチーフを残した。この点を朔太郎が自覚していたことは、「握つた手の感覚」のなかで、「私にはこれに似た経験が、以前にもたびたびある、私の詩はたいいて此の不可思議な直覚からきたものである」(『全集』第3巻、193頁)と語っていることから知られる。「新生」事件のもつ、もっとも重要な意義は、まさしく、ここに求められる。⁹⁾これ以後の作品は、朔太郎にとって、「新生」事件の解説という意味を帯びてくる。

五月に入って、朔太郎は、上京し、室生犀星らと語らって、新しい詩誌の創刊に奔走する。誌名は、朔太郎の発案で、『感情』と決められた。同人として、竹村俊郎、恩地孝四郎ら、のちに山村暮鳥が加わった。

六月に発刊された『感情』創刊号は、朔太郎の長編詩「虹を追ふひと」によって誌面が占められていた。この雑誌にかける朔太郎の意気込みが感じられる。

「虹を追ふひと」については、朔太郎自身が、さきに引いた六月初(推定)の高橋元吉宛「書簡」で、この作品の主人公「王朔方」は「とりも直さず作者の私自身の心です」と自ら解説している。(『全集』第13巻、121頁)

また、大正五年六月二十二日付の萩原栄次宛「書簡」に、「^{ワツ}扁中の主人公、王朔方はもちろん小生です、小生が過去三十年間に渡つて「救ひ」を求めて煩悶した苦しい心の旅行を記述したものです、あの男の「求めるもの」はもちろん、近代人の「救ひ」であり宗教であります」とある。(『若き日の萩原朔太郎』222頁)

そこには、「新生」のよろこばしい興奮が過ぎたあとの、「新しい道」(前掲高橋元吉宛「書簡」125頁)への旅だちが記されている。

この作品は、皇帝の命を受けた王朔方と徐福が、「不老不死の仙薬」を求めて、空しく「曠野を漂泊する」様を描き、つぎのような二人の会話で終わっている。(『全集』第4巻、485頁)

「ああ、お前は夢を夢みる人だ、所詮、甲斐のないことを知りながら虹を追って行く人だ。いつも幸福で居てくれ。／でも、おれにはさうするより外に仕方がないのだ。この最後の一行について、安藤靖彦氏は、さきに引いた「握った手の感覚」前後——萩原朔太郎論の一節」で、「新生」は未遂におわったという文脈から、

これは明らかに徐福のいわば通俗的立場に勝ちを認めているものではないのか。この「でも」という発想はあのイワンに見た「近代思想の勇者」の敗北を示すものではないのか。(中略)つまり「でも」と発想されるその文学的・思想的地盤は犀星訪問・ドストエフスキーとの出会いにおける二様の試みの惨憺たる結末の中で失われていたのである。(前掲、57頁)

と論じている。

しかし、すでに指摘したように、「新生」は、挫折でもなければ、たんなる幻影でもなかった。「虹を追ふひと」の最後の一行「でも、おれにはさうするより外に仕方がないのだ」には、むしろ、高橋元吉に「新生」を伝えた四月十九日の「書簡」で、リフレインのように二度くり返される「そうするより外に仕方がないんだ」(『全集』第13巻、113、114頁)という言葉が反響しているように見える。

「虹を追ふひと」の末尾に付された「感情のために」という一文で、朔太郎は、「兎に角、これを書きあげてから、自分は三十年来の負担をやつと一つだけ軽くすることが出来たやうな気がする。／今まで胸いつばいにつかへて居ながらどうしても言ふことの出来なかつたある一種の苦しい感情を、意義のある言葉に(もちろん極めて拙劣ではあるが)まとめて抽象することが出来たのが嬉しいのである」(『全集』第4巻、486頁)と述べている。

この文を引いて、阿毛久芳氏は、「虹を追ふひと」と「天に怒る」——萩原朔太郎の成年から中年期」(『日本文学』昭和53年4月)で、

これは、「私が過去の全生涯三十年間の生活の解決」としてあった、〈新生〉体験に基づいていたことがわかる。(中略)「虹を追ふひと」発表時には、既にこの体験は、一種の一次的「精神病」の発作とも考えられていたが、「救はれはしなかつた」けれども「救ひに導かれた」、という新しい道への自覚をもたらしめているのである。(『萩原朔太郎論序説——アイデアを追う人の旅』49頁、昭和60年5月、有精堂)

と指摘している。「虹を追ふひと」が、「新生」体験において朔太郎がつかみとった「救い」を形象化した作品であることは疑いあるまい。しかし、その「救い」とはなにか?

萩原隆氏は、『若き日の萩原朔太郎』に付された「〈付録〉朔太郎私見」の最後で、「この作品は、人間朔太郎を知るうえで重要な資料である」として「虹を追ふひと」を取り上げ、つぎのように述べている。

夢を夢と知り、幻影を幻影と知りながら、現世に求められないものを追い続けて行こうとする作者の覚悟が、ここに表明されるのである。／これは、詩人としての自覚である。また自信の表明でもあろう。／(中略)彼にとって、その追い求めていく夢とは、詩であり、「人生の新しい意義」であり、「充実した生活」でもあった。これが彼の生きざまであった。これが詩人朔太郎の原理であり、彼の存在理由でもあったのである。

(前掲、327頁)

「俺は陛下に命ぜられたわけではない。俺は俺自身に命ぜられている」という王朔方の設定には、「もともと彼の自発的、積極的意欲に発したものでない」「強いられた長い漂泊

の年月」(同、323頁)が投影しているという萩原氏の指摘には説得力がある。

一年間の沈黙のなかで、朔太郎がつかみとったものは、おのれが詩人であり、「でも、おれにはさうするより外に仕方がないのだ」という宿命の自覚であった。それが、朔太郎にとっての「新生」体験の意味であり、「三十年来の負担」の解決にほかならなかった。いま、朔太郎は、詩集発刊という「秘密」の「事業」を射程に入れた一年間の沈黙のはてに、詩人としての道、すなわち詩人としての自己証明のための処女詩集への道を、いっしんに歩みはじめるのである。

同じ元吉宛「書簡」には、この「虹を追ふひと」のほかに、「いつかお話した別の詩「奇蹟」(玩具をほしがる小児と老人の対話)」と、『『青い鳥を握つた手の感覚』かういふ題で私はこのことに関する感想を来月の詩歌に発表します』という、「新生」体験を記録した二つの作品についての言及が見られる。(『全集』第13巻、121、125頁)前者は、『詩歌』六月号に掲載された「笛」であり、後者は、同誌七月号所載の「握つた手の感覚」である。

「笛」は、元吉宛「書簡」に見える「奇蹟」とは、少し設定が変えられ、対話体でもないが、最終連に「奇蹟」という言葉が見え、「玩具をほしがる小児と老人」というテーマには変わりがない。

この作品が、「新生」体験において朔太郎が獲得した救いを形象化したものであることは疑いない。米倉巖氏は「笛は魂の救済の象徴ということになる。「笛」においてこの詩人は救済の歓喜を構築したわけである」(前掲『萩原朔太郎——文体核と文体素』47頁)と指摘し、小野田典子氏は「つまり、朔太郎がこの詩で表わそうとしたものは、ドストエフスキーの苦悩こそが自分に生きる力を与えてくれるのだという自覚である」(前掲「ドストエフスキーとの邂逅——萩原朔太郎論」62頁)と述べ、阿毛久芳氏は「「救はれはしなかつた」けれども「救ひに導かれた」、という〈新生〉体験は、子供と父、そして語り手に笛がどう映っていたかを表すことで、典型化されたのである」(前掲『萩原朔太郎論序説』38頁)と論じている。

子供は扉をひらいて部屋の一隅に立つてゐた。／子供は窓際ですくすく突つぷしたおほいなる父の頭悩をみた、／その頭悩のあたりははなはだしい陰影になつてゐた。／子供の視線が、蠅のやうに力なくその場所にとまつてゐた。／子供のわびしい心がなにものかにひきつけられてゐたのだ。／しだいに子供の心が力をかんじはじめた。／子供は実にはつきりとした声で叫んだ。／みればそこには笛が置いてあつたのだ。／子供が欲しいと思つてゐた紫いろの小さい笛があつたのだ。(部分『全集』第1巻、93頁)

この作品の草稿には、朔太郎自身の手で、つぎのような解説が付されている。

子供は求める心の象徴である、父の〈心〉思想は〈苦〉私の感情〈である、〉そのもの〈である、〉象徴である、父の〈思想〉生んだ奇蹟は〈私と先生→私の感情〉求める心と感情との不思議な交錯及びその結果である、而して笛はもちろん〈救ひである、〉救ひである、(部分、同、400頁)

抹消された一節に、「先生」とあるように、この作品が、ドストエフスキーとの出会いによってもたらされた「奇蹟」=「新生」を形象化したものであることは疑いない。「握つた手の感覚」にも、この作品が「新生」事件の「少し後に出来たもの」であり、「当時の私の心もちを象徴して居るやうに思はれる」と述べられている。(『全集』第3巻、204頁)

しかし、ここで強調しておきたいのは、「新生」体験における救いが、「笛」というかたちで形象化されたことの意味である。「子供」すなわち「求める心」が「卓の上」に発見し

た「笛」とは、歌うべき作品のモチーフのメタファにほかなるまい。「ある混み入った思想のちれんま」をとおして「父」が「子供」に残した「笛」=「救ひ」とは、詩人としての朔太郎を導く新しいモチーフのことであった。詩人は声をとりとどしたのだ。

興奮は一週間ほどで去ったが、「新生」事件は、朔太郎に、あるはっきりとした印象を残した。「笛」とか「握つた手の感覚」などの言葉によって、朔太郎が表現しているのは、「新生」が残した確かな手応えであった。「握つた手の感覚」のなかで、朔太郎は、つぎのように書いている。

『握つた手の感覚』は今でも私に、新鮮な勇氣と希望とをあたへる。いつかは自分も『幸福』を体感することが出来るにちがひない。いつかは自分もほんとの『愛』を知ることが出来るにちがひない。そして必ずいつかは『神』を信ずることが出来るにちがひない。(中略)それが私の『力』である。私はやつぱり空を握つたのではなかつた(『全集』第3巻、197～8頁)

註

- (1) 『沙羅樹』大正四年九月号に掲載された「もみじ」は、明らかに旧作である。その原形となる同名の作品が『習作集第九巻』に見える。(『全集』第2巻、522頁)大正三年九月頃のものとして推定される。また、(大正三年)「十一月作」の付記のある「孝子実伝」の草稿「孝子伝の第一人」の記された原稿用紙に、「〈透青〉木く々のもみぢば」立をすぎて／＼木々のもみぢば木ぬれをそめ」という書きこみがあり(『全集』第3巻、438頁)、「もみじ」の発想の原点を示している。
- (2) 嶋岡農氏は、大正三年一〇月に朔太郎が「港屋」を訪れたさい、その店頭で、前月創刊された『月映』を手にした可能性を示唆している。(『伝記萩原朔太郎』上巻、131～2頁、昭和55年9月、春秋社)なお、『月映』については、栗原敦氏が「『月映』について——萩原朔太郎『月に吠える』の周辺」で、くわしく紹介している。その中で栗原氏は、恩地孝四郎と白秋、犀星との交流は「大正三年八・九月頃」からあり、「彼らを通じて『月映』第一輯の頃には恩地と朔太郎の出会いはずであつたとも考えられる」と推定している。(『金沢大学国語国文』昭和58年3月)また、坪井秀人氏の「朔太郎と恭吉と——『月に吠える』における詩画の交渉」(『金沢美術工芸大学紀要』昭和63年3月、『萩原朔太郎《詩》をひらく』平成元年4月)にも、くわしい考察がある。
- (3) 長野隆氏は「萩原朔太郎『月に吠える』の思想と方法」(『詩論』昭和60年6月)で詳細にこの「雲雀の巢」を分析している。しかし、「作中の「おれ」が「卵」へと手を伸ばして行く行為は、「生命」それ自体に触れようとする“意味”に他ならない。そして肝心なのは、そういう「生命」に手を伸ばす行為がひとまず己れの貪心の帰結を暗示させながら、尚かつ“自然の禁忌”に触れるような心理的禁圧を与えずにはおかぬ、作者固有の思想のあらわれである」という分析は、「雲雀の巢」のモチーフからほとんどはなされている。(22頁)
- (4) 『全集』には「推定四月」とあるが、久保忠夫氏の指摘に従った。「朔太郎書簡覚え書(つづき)——萩原朔太郎全集『書簡』を読む」『東北学院大学論集(一般教育)』昭和52年9月、25～6頁)
- (5) 阿毛久芳氏は「〈新生〉体験における萩原朔太郎——『カラマゾフの兄弟』に関連して」で、木村氏の所説にふれ、「山に登る」の草稿に見える「K」、未発表作品「三人づれ」に見える「K」など、それ以外の可能性を示唆したうえで、「これらのKが、「雲雀の巢」のKと同一であるということは、確かめられない。けれども個別性の強い、選ばれた意味を表す文字であることは言えよう」と指摘している。(前掲『萩原朔太郎序説——アイデアを追う人の旅』32頁)なお、この「K」については、カラマゾフの英語表記 Karamazovy の頭文字ではないかという推定を、ここで提起しておく。
- (6) この「厭人病者」は、イワン・カラマゾフのことである。これについては、木村幸雄氏が「萩原朔太郎の「雲雀の巢」について」で、これをスメルジャコフとする久保忠夫氏の見解を否定し、米川正夫訳『カラマゾフの兄弟』から該当箇所を引いて、イワンであることを指摘した。(前掲、87頁)ついて、阿毛

久芳氏は「〈新生〉体験における萩原朔太郎——『カラマーゾフの兄弟』に関連して」で、木村氏の所説をふまえ、さらに、朔太郎自身の書き込みのある前橋市立図書館所蔵の三浦関造訳『カラマーゾフの兄弟』から該当箇所を引いて確認している。(前掲、33～4頁)前橋市立図書館所蔵の三浦関造訳『カラマーゾフの兄弟』(大正3年10月、金尾文淵堂)第二巻の500頁から2頁にかけてのつぎの箇所に、朔太郎自身の手でピンクの色エンピツで波線が引かれている。「俺はお前に一つ告白して貰はねばならぬ事がある」とイヴァンは初めた。「俺は何故人は其の隣人を愛しなければならぬのか理がわからぬ。俺の心では、遠くに隔れて居るものは愛する事が出来るが、隣人は愛することが出来ない様に思はれる。俺は何処でか聖人ジョンの事を書いた本を読んだ事があるが、或時飢へ凍へた一人の乞食が尋ねて来ると、彼は其を自分の床に入れ、抱いてやつて、激い病気の勢で汚なく爛れた口に息を吹かけてやつたと云ふ事である。其は悶絶の余りにやつたのだ。焼になつてやつたのだ。自分に課せられた義務の為だ。虚偽の仕業だ。真人を愛するには隠れて愛しなければならぬ。顔を現はしたら愛は消えて行く。」/「ゾシマ様も其の事を度々お話になりました」とアリオシヤは話し出した。「長老様も人間の顔が真の愛を遮ぎるといふ事を仰せになりましたが、其でも私は人間の間には大なる、キリストの様な愛のある事を知つて居ます。」/「俺には其慶事は解らない。人に基督の愛があろうなどは全々思へないよ。基督は神であつた。吾々は神では無い。例へば茲に俺が非常に苦しんで居ると思ふて見玉へ。他人は他人で俺で無いから、何程俺が苦しんで居るかを知らぬ事は出来ない。其に加へて、人は仲々他人たる俺の苦痛を許さない。何故許さないか知つて居るかい？其は俺が汚ない臭を発して居るからだ。俺の顔が可怪しいからだ。俺が嘗て彼の足を踏んだくつたからだ。人は抽象的か、遠く離れて居れば隣人を愛する事は出来るが、一処に居れば殆んど出来ない。」(原文総ルビ)さらに、小野田典子氏は、「ドストエフスキーとの邂逅——萩原朔太郎論」で、スメルジャコフ、イワンに加えて、『カラマーゾフの兄弟』中の、ゾシマ長老に「厭人病の悩みを訴える貴婦人」を挙げている。(前掲、59頁)

- (7) 『月に吠える』前半期において、朔太郎の関心は、おのれの病気の意味を明らかにすることに向けられていた。拙稿「内部にいる人——『月に吠える』前半の課題」『愛知教育大学研究報告(人文科学)』平成3年2月参照。
- (8) この作品と同じ「眠る」というモチーフをもつ未定稿が、この時期に制作されたと推定される未発表作品の中に残されている。「わたしはずいぶんながいあいだ、地べたの下へもぐつてゐた。/地べたの下からあたまを出して。《〈狡〉土龍のやうに展望す》/土鼠のするやうに。/狡猾らしく展望することさへもしなかつた。/ (中略) /わたしの眠つてあるあひだに、/わたしの頭のうへの地面を通行人がふみつけて行つた。/みんなは幽霊のやうに歩いてゐた。/ (中略) /そうしてわたしはしづかに眠つてゐた。」(「蛙料理」部分『全集』第3巻、394～5頁)「つかれきつた魂がねむつてゐる/みどりのこんもりとした木立ちのかげに/わたしの青ざめた手足がすやすやと眠つてゐる」(無題、部分、同、513頁)また、「一九一六・七」(大正5年7月)というはっきりとした日付をもつ無題の作品のうちにも、この「眠る」というモチーフが現れている。「ゆめの中ではやさしい愛憐のこころをうしなはない、/ああ いかねばこそ、夢にはかくしもしたしき愛感くをもよほすものを)の根ざしをもよほすものを、/ゆめよりさむることなかれ、/ゆめよりさむることなかれ。/いまはしづかな風景のゆめにゆすられながら、/わたしの心はおさな児のやうにすやすやと眠つて居る。/<とほい傾斜をくだつてゆく乳母ぐるまの中に身をよこたへて。>」(同、393頁)このモチーフは、やがて、『秀才文壇』大正六年六月号に掲載され『青猫』に収録された「野原に寝る」に引きつがれる。「ひろびろとした野原に寝ころんで、/まことに愉快な夢を見つけた。」(『全集』第1巻、147頁)
- (9) この点について、菅野昭正氏は、「もしこの出来事をきっかけとして、詩人の想像力に新しい活力がそそぎこまれ、しばらく詩を発表しないと宣言していた詩人がふたたび詩筆を執り、その詩の世界に新しい眺望が切りひらかれるという事態がおこったのでなければ、「握つた手の感覚」はとくに筆を費すまでもない文章である。が、幸いにして、この「奇蹟の出来事」の水脈から流れる水は、想像力に蒸留された上で詩の世界にそそぎこまれ、生の経験から詩への通路が開かれる。」と指摘している。(『詩学創造』140頁、昭和59年8月、集英社)

[付記]引用文中で新字体のある漢字はそれに改めた。一部誤字を改めた。抹消を示すくくく、補足を

〈新生〉事件まで——『月に吠える』後半の課題(一)

示す〔 〕の符号は『全集』に従った。作品は初出形を尊重した。

(平成4年9月8日受理)